

鳥飼玖美子 『通訳者と戦後日米外交』

(みすず書房, 2007年, 399頁)

軽 部 恵 子

キーワード：通訳，日本，アメリカ，外交，日米関係

本書は、同時通訳者の草分けの1人で、英語教授法の専門家である鳥飼玖美子・立教大学教授が、イギリスのサウサンプトン大学に提出した博士論文（原題：*Diplomatic Interpreters in Post-World War II Japan: Voices of the Invisible Presence in Foreign Relations*）を日本の読者のために書き直したものである。ページ数の関係で著者の博士論文に含まれていた方法論に関する理論的な解説が一部割愛された一方、日本の通訳教育に関する記述が加えられ、同時通訳者5人に対して著者が聞き取りした記録を、原語の日本語でできる限り多く採録した。

周知のとおり、著者は上智大学外国語学部イスパニア語学科在学中の1966年から国際会議の同時通訳者として活動を始め、1969年のアポロ11号による月面着陸中継の同時通訳を担当して一躍有名になった。その後、テレビ通訳、キャスター、インタビュアーのほか、1971年4月から1992年9月までの約20年間、文化放送のラジオ番組「百万人の英語」の講師を務めた。著者の親しみやすい笑顔とアナウンサーとしても通用する美声を知る人は多いだろう。

著者は1986年まで国際会議の同時通訳者として活躍したが、「通訳をすることが苦しくなって大学職に転じた」（p. 380）。その理由は、通訳は「賛成できない意見でも自分を殺して訳さなければならぬ」だったからだという（2007年9月11日付読売新聞記事）。1989年4月、著者は東洋英和女学院大学人文学

部の専任講師に就任し、1990年10月にはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで言語・文学・社会学研究科の修士課程（英語教授法専攻）を修了した。1993年4月に東洋英和女学院大学で助教授に昇任し、2年後に社会学部助教授となって、1997年3月に同学部教授に昇任した。1997年4月、立教大学大学教育研究部英語科に教授として迎えられ、1年後に観光学部観光学科の教授となった。2002年4月、大学院異文化コミュニケーション研究科の教授を兼任し、2006年4月には経営学部国際経営学科の教授となった。そして、2007年6月にイギリスのサウサンプトン大学の博士課程を修了し、博士号を授与されたものである。

著者は、大学教員として教壇に立つほか、多数の審議会委員を歴任し、国内外の学会に所属している。2000年に設立された日本通訳学会（1990年に発足した通訳理論研究会の後身）の最初の副会長に就任し、2004年以降は会長を務めている。

著者には多数の著書があるが、ここ10年間の主要なものとして『異文化をこえる英語：日本人はなぜ話せないか』（丸善、1996年）、『ことばが招く国際摩擦』（ジャパントイムズ、1998年）、『「プロ英語」入門：通訳者が実践している英語練習法』（講談社インターナショナル、2001年）、『TOEFL・TOEICと日本人の英語力：資格主義から実力主義へ』（講談社、2002年）、『歴史をかえた誤訳』（新潮社、2004年）、『危うし！小学校英語』（文藝春秋、2006年）が挙げられる。著者は英語教授法の研究者として、日本人の英語力の実態把握や英語力低下の原因究明をせずに小学校から英語を学ばせる現在のカリキュラムに対し、警鐘を鳴らしていることでも知られる。

現役の、あるいは引退した通訳者が執筆した本は数多くある。その内容から、①通訳者が仕事の上での苦労話や失敗談を記した、あるいは自身が通訳を担当した政治家・外交官にまつわるエピソードを綴ったもの、②通訳者としての経験に基づき日本と外国の相違点を論じたもの、③通訳者になるための基礎知識や訓練法等を説明したもの、④一般読者向けに英語の勉強方法や活用方法について助言したもの、⑤日本語の表現を英語にどう訳すか解説し

たもの、の5つに大別できるだろう。どの分野の本にもそれぞれの意義がある。また、1冊の本に複数の分野が盛り込まれている場合も多い。

本書が既存の出版物と異なる点は、本書が研究書であることに尽きるだろう。具体的には、(a)冒頭2章と第7章で通訳と翻訳の研究に関する理論を比較検討し、研究史を整理した、(b)語り手の個人的な知識から引き出された情報を学問的問題として取り上げる「オーラル・ヒストリー」の手法を採用し、同時通訳者5人から言語習得過程および現代史に関する貴重な証言を得た、(c)通訳が発端となった外交問題の経緯を聞き取りと資料に基づき丹念に検証した、の3点を挙げられる。本書は本文だけで382頁と分厚いが、著者の論旨明快な文章のおかげで見かけよりずっと読みやすい。

第1章「はじめに」で、著者は本書を貫く問題意識を説明する。「1 透明な存在」で、通訳者は姿があってそれを見せず、声はしても己の声であってはならないという、伝統的な通訳のあり方が説明される。「2 通訳の歴史」では、文字に資料が残される翻訳の歴史と比べ、通訳の歴史はまだ研究が少ないことが指摘される。通訳者に守秘義務があり、通訳が公式記録に残らないことも、学術研究の対象になりにくかった理由であるという。「3 日本の戦後外交史における通訳」では、戦後日本で日本語と英語の同時通訳者として活躍した5人を選び、「(1)戦後の日本で、どのような人が、なぜ、どのようにして通訳者になったのか。(2)同時通訳の先駆者たちは、自らの役割をどのように認識していたのか。(3)実際の通訳現場では、どのような役割を果たしていたのか」(p. 11)、の以上3点を中心に聞き取りしたことが説明される。「4 研究手法としてのオーラル・ヒストリー」では、「通訳者の語りを通して、戦後日本の対外関係という社会文化的コンテクストにおける通訳の役割を探る」(p. 17)という研究目的を説明する。オーラル・ヒストリーは、インタビューから口述資料を収集することを出発点とする(p. 12)。「5 ライフストーリー・インタビュー」では、上述の3つのポイントに基づき、言語能力と文化リテラシーおよび外交交渉での通訳に関する質問を著者が予め準備したが、最終的には「自由な流れ」のインタビューを行ったことが説明され

ている (pp. 22 - 23)。

「6 同時通訳パイオニア」では、著者の聞き取りに応じた5人の同時通訳者が紹介される。彼らは、アポロ11号の月面着陸をNHKで同時通訳した日系二世の西山千(1911 - 2007)、「憲政の神様」尾崎行雄の次女で、自身の長女も同時通訳者になった相馬雪香(1912 -)、サイマル・インターナショナルの初代社長になった「ミスター同時通訳」こと村松増美(1930 -)、「同時通訳の神様」と呼ばれ、NHK教育テレビの講師、日本テレビのニュースキャスター、三木武夫外務大臣の秘書官などを経て参議院議員になった國弘正雄(1930 -)、沖縄返還など数多くの外交交渉や先進国首脳会議(現・主要国首脳会議)の通訳を行った小松達也(1934 -)である。

第2章「これまでの通訳と翻訳に関する研究」は、「1 翻訳と通訳」「2 翻訳研究」「3 通訳研究」の計3節から構成され、各分野の理論が紹介される。著者によると、日本語では書記言語を訳すことが「翻訳」、音声言語を扱うことが「通訳」だが、英語の“translation”は日本語の翻訳と通訳の双方を含みうる語句である(p. 31)。かつて“translator”は日本語で通詞、通弁などと呼ばれた。今日では通訳者、通訳士、通訳人(法廷の場合)と呼称することが増えたという(同)。翻訳者と通訳者を区別する際は前者を“translator”、後者を“interpreter”と記す(同)。通訳には、会議場のブース内でヘッドフォンをつけ、発言者の言語を次々に翻訳していく「同時通訳」と、発言内容をメモにとりながら話の区切りごとに訳す「逐次通訳」がある(p. 32)。

会議通訳が始まったのは1919年のパリ講和会議である。ウッドロー・ウィルソン米大統領とロイド・ジョージ英首相が当時の外交の共通語であったフランス語を解さなかったため、逐次通訳が用いられたという(p. 51)。国際会議に同時通訳が導入されたのは、第二次世界大戦後のニュルンベルク裁判である(p. 51)。

第3章「日本における通訳と翻訳 その歴史と社会文化的な意義」は、日本史における通訳の歴史を振り返る。常に外国の文化文明を取り込んできた日本にとって、通訳と翻訳はきわめて重要な役割を果たしてきた。極東国際

軍事裁判では、日系二世を中心とした27名が日英の通訳を務めた（p. 61）。

第4章「通訳者の『ハビトゥス』」は、同時通訳者の英語習得歴と生育環境、すなわち「ハビトゥス」(*habitus*)を分析することで、通訳者になる人物像と人間としての通訳者を解き明かそうと試みる。

5人の通訳者たちの生育歴を見ると、全員が幼い頃から英語に触れていたわけではない。西山千の両親は日本人だが、本人はアメリカで生まれ育ったので、パイリンガルの環境にいた。日本人の父と日英ハーフの母を持った相馬雪香は、父とは日本語で、母とは英語で話していた。一方、小松達也、村松増美、國弘正雄の3人はいずれも日本で生まれ育ち、外国語として英語を学んだ。このうち、村松と國弘は第二次世界大戦中から学校で英語を学んだ。2人が初めて言葉の醍醐味を知ったのは、必ずしも英語のクラスではない。下町育ちの村松は腕力でいじめっ子にかなわなかったが、啖呵を切っていじめっ子を撃退した（p. 79）。東京育ちの國弘は中学2年の時に父の転勤先の神戸で初めて関西弁に接し、地元の子と意思疎通できなかった（pp. 82 - 83）。本章を読むと、言葉の重要性を知り言葉に敏感になることが母語の習得に役立ち、ひいては外国語の習得に役立つと思わせる。

第5章「通訳という『フィールド』へ」は、日本を代表する初期の同時通訳者5人が現場で経験した様々なできごとを紹介する。評者にとって最も印象的だったのは、1962年10 - 11月のキューバ危機回避後のエピソードである。同年12月、日米閣僚会議がアメリカの首都ワシントンで開催されたが、通訳者として同席していた國弘はケネディ大統領のフケを目撃した。アイルランド系の赤い髪の上に落ちた白いフケはいっそう目立ち、大統領の抱える「重荷」を感じたという（p. 222）。國弘はキューバ危機のさなか日本からの視察団に同行してフロリダを旅行しており、核戦争が不可避と覚悟して東京の家族に別れを告げるべく国際電話をかけている（p. 220）。通訳者は、ケネディの抱えた重荷を我が身の体験と重ね合わせたのだろう。

第6章「『実践』としての通訳」で最も注目すべきは、日米首脳会談のため訪米していた中曽根康弘首相（当時）の「不沈空母」発言である。1983年1

月、アメリカ有数の新聞『ワシントン・ポスト』の当時の社主キャサリン・グレアム (Katharine Graham, 1917 - 2001) は自邸での朝食会に首相を招いた。中曽根は同紙の論説委員らと歓談し、日本が「大きな航空母艦」のようになり、ソ連の爆撃機侵入を防ぐ巨大な防衛のとりでを築くべきという持論を展開した (pp. 275 - 277)。通訳者の村松は、中曽根の「かっこつけていった」語調 (p. 279) と、首相が日頃から安全保障に関しタカ派的な意見の持ち主であることを考え合わせ (pp. 283, 292), 「大きな航空母艦」の「大きな」に英語で巨大な軍艦を指すときによく使われる形容詞 “unsinkable” (p. 278) をあて、断固とした口調で訳文を述べた (p. 279)。大きいと決まっている航空母艦を “big aircraft carrier” と訳すのは「ナンセンスカル」(nonsensical, 「無意味な, ばかげている」の意) という理由もあった (pp. 282 - 283)。とっさの判断だったが、首相は「毅然とした英語の語調を気に入」り、陪席の駐米大使、外務次官、記録係の広報担当者も「うん。よかった」と言い、村松自身「快心の訳だと思った」(p. 279)。この会見は開始前にグレアム社長が首相本人に確認した上で「オン・ザ・レコード」となり、「オフ・ザ・レコード」と指定された箇所以外をテープに録音した (p. 276)。

日本の報道陣は、朝食会ではとくに何もなかったと外務省から聞いていた。しかし、夜『ワシントン・ポスト』の一刷りが彼らの宿泊先に届くと騒然となった。「大きな航空母艦」はオン・ザ・レコードの発言だったが、記者たちは辞書を調べて “unsinkable” を「不沈」と訳し、真夜中に外務次官と広報官をたたき起こして質問攻めにした (p. 278)。騒動を受け、中曽根首相はアメリカの報道陣を対象とした記者会見で発言を認め、日本の報道陣を対象にした記者会見では否定した (p. 279)。村松の推測では、首相が「『私の使ったことばは違うけれど、意味はそうだ』と言うのが当然なんだけども、しまったと思ったもんだから否定しちゃったんですよ。じゃあ、なかった、言ってない、誤訳だ、ということになったわけですよ」(p. 281)。

1 - 2日後、「日本の広報官」がワシントン・ポスト社の録音した朝食会のテープを聴いたところ、中曽根の発言に「不沈」という日本語は使われてい

ないことが判明し、『ワシントン・ポスト』の記事を書いたオーバードファー（Don Oberdorfer, 1931 - ）記者は愕然とした（p. 281）。首相と外務省の説明は二転三転し、ソ連から抗議され、通訳者が誤訳したことにされた（p. 283）。オーバードファー記者は騒動の数日後にシュルツ国务長官に同行して訪日したが、村松の理解によれば「古い友人として」彼をお茶に誘いながら、村松から聞き出した話を彼の意に反して記事にした（p. 285）。村松の記憶によると、『朝日新聞』だけは、正確さで定評のあるサイマル・インターナショナルの村松が通訳を担当したのだから総理はそう発言したに違いない、という趣旨の囲み記事を掲載した（p. 284）。

第6章にはもう1つ重要なエピソードがある。宣教師の次男として東京に生まれ、18歳まで日本で暮らし、日本語に堪能だったエドウィン・ライシャワー駐日アメリカ合衆国大使（Edwin O. Reischauer, 1910 - 1990, 在任1961 - 1966年）は講演でいっさい日本語を使わず、既に優秀な通訳者だった西山千にすべて通訳させた。要職にある者はいかなる言い間違いも許されないからである。大使は1回の講演で必ず2 - 3回は壇上から西山の訳を訂正した（p. 243）。元々、西山は電気工学を勉強したが、大使の講演には歴史の話が多かったことにも起因する（p. 242）。二人のやりとりはまるで掛け合い漫才のようであった、と西山は述懐する（同）。

しかし、聴衆の面前で訂正された通訳者は不快感を持つどころか、その方が安心だったという。「訳の訂正というよりは、理解力、つまり情報のとらえ方の訂正と考えれば、なにも気にする必要はありません」（p. 244）。それほど二人は深い信頼と友情によって結ばれていた。後年訪米した西山夫妻をライシャワーは自宅に泊め、病身にもかかわらず自ら魚屋で大きなロブスターを買い、夫妻のために料理したという（pp. 245 - 246）。

1964年3月24日、講演会で19歳の少年に刺された大使は輸血から肝炎に感染し、終生苦しんだ事実は、50歳代以上の日本人によく知られている。当時日本にはいわゆる売血制度が存在していたが、事件を機に民間の血液銀行から日本赤十字社の献血制度へ移行した。西山によると、ライシャワーは日本

について恨みがましいことを1回も述べなかったという(p. 245)。なお、「血清肝炎」とは輸血による肝炎感染を意味する(p. 244)。

第7章「考察 通訳の役割をめぐって」は、第4 - 6章のケーススタディを基に、通訳と翻訳を理論的観点から分析しなおす。第2節「通訳における文化的要素」で、著者が5人に対し「文化をどのようにして学んだか」「通訳をしている際に、どのように文化的差異に対応したか」と問うたところ、小松は否定的な反応を示し、他の4人は質問に関心を示さなかった(p. 335)。村松は、ソニーの創設者井深大の発言「やぶさかではない」を「起点言語中心の通訳方略を採用し」(p. 344)、できるだけ日本語に近く“I would not be unwilling to consider your proposal.”と訳した(p. 343)。相手のアメリカ人はこの英文を理解できずに説明を求めたが、井深は村松の顔を見てニヤッと笑い、「やぶさかではないと言っておいてよ」と言い、村松は同じ訳を繰り返した(同)。村松は、井深の真意を酌み取れないのは日本文化をあらかじめ勉強してこなかった相手方が悪いと思った(p. 344)。

もっとも、第7章第3節「通訳者の役割とは何か」は、研究者の間でも通訳の役割について意見が分かれていることを示す。日本語と英語のベテラン通訳で、日本通訳学会初代会長の近藤正臣・大東文化大学教授は、西山千と同じく「誤解のないことが重要」という立場をとる(p. 351)。一方、日本語 - 中国語の通訳者である永田小絵・獨協大学専任講師によると、中国では通訳者を「小さな外交官」と呼び、国際親善・友好促進という大目標に奉仕する職業と考え、「何のために訳すのかという目的志向」だった(p. 351)。通訳スクールでは、「会社の利益や日中友好を阻害することが明らかであれば必ずしも『言った通り』に訳さなくてもいいし、大きな目標を達成できれば個々の言い回しなど大した問題じゃない、という雰囲気があった」(p. 352)。同時通訳者の相馬雪香は、「いやしくも通訳をめざす人間は、国の為、世界の為に貢献することを使命とするべきである」と固く信じる(p. 305)。相馬の信念は、民主政治と世界平和の実現に一生を捧げ、世界連邦を提唱した父の影響と、「尾崎の娘」という自負に基づくところが大きいのではないか。

通訳者は、常に透明・中立・忠実の原則を守っているわけではない。三木武夫首相が1975年に訪米した際、國弘は首相秘書官として同行した。ワシントンのナショナル・プレス・クラブで開かれた昼食会の最後、アメリカ人記者から出された首相への質問に対し、國弘は三木のまったく発言しなかったジョークで答えた。通訳者の立場を越えた、本人いわく「けれん」の通訳は大いに受け、それもあってか『ニューヨーク・タイムズ』の有名コラムニスト、レストン（James Reston, 1909 - 1995）が三木の訪米をきわめて好意的に取り上げた（pp. 307 - 312）。また、国連総会でソ連代表（本書では「ロシア代表」と記述）のモロトフ（Vyacheslav Mikhailovich Molotov, 本名Skryabin, 1890 - 1986）が行った長い演説を、「モロトフ氏は『ノン』と言っております（“M. Molotov dit non”）」と一言でまとめたロシア語 - フランス語の通訳者もいた（p. 306）。

終章「今後の課題」は7頁とごく短いですが、今後の研究課題を整理する。通訳者が通訳の役割をどのように解釈してもあくまで第三者であり、その存在が当事者間のコミュニケーションに何らかの影響を及ぼす（p. 375）。著者は、歌舞伎の「黒衣（くろこ）」が通訳者の役割を考える上で「鍵概念」になるとした（p. 376）。黒衣は舞台の上で役者の演技を助けるが、決して透明ではなく、観客から見えている。そして著者は、「通訳者は、『透明な機械』ではなく、異文化接触を橋渡しするコミュニケーションの専門家である。『黒衣』としての役割を果たす中で、共感と情熱、そして強い意志と洞察に支えられ、自身の判断で自立的に創造性に富む決定を下している。その意味で通訳者は、透明性や匿名性を越えた存在だといえる」（p. 378）と結んだ。この結論は、著者が長年通訳者のあるべき役割について悩み、5人の大先輩から彼らの体験を聞き取り、考察を重ねた末に到達したものである。

次に、評者は本書に対していくつか指摘をしたい。第1に、本書の題名は「戦後日米外交」より「戦後日米関係」の方が適当ではなかったか。本書は日米それぞれの外交（foreign policy）における通訳の役割を分析したのではなく、著者自身が述べたように、「戦後日本の対外関係という社会文化的コンテ

クストにおける」通訳の役割を研究した (p. 17)。また、本書のもとになった著者の博士論文タイトルにも「外交関係」(foreign relations)が使われている。そこで、評者は、紀要目次に必要な英文タイトルを“*Interpreters and Japan·U.S. Relations after World War II*”(通訳者と戦後日米関係)と訳した。ただし、著者に意図を確認しあるいは了承をとったわけではないことを明記しておく。

第2に、語句について指摘をしたい。「出入国管理及び難民認定法」(昭和56年法律第86号)の1981年4月施行にともない、入国管理事務所は地方入国管理局へと名称変更された(p. 50)。地方入国管理局の下には同支局が、その下に出張所がある。尾崎行雄は「憲政の父」ではなく、「憲政の神様」と称された(p. 26)。なお、尾崎行雄記念財団ホームページは、尾崎が「憲政の神」と呼ばれ、「『議会政治の父』と仰がれ」たと紹介している。第78代内閣総理大臣の名前は「宮沢喜一」ではなく、より正確に「宮澤喜一」と記すべきだったのではないか。もっとも、新聞報道では活字の制約上、新字体が多い。いずれの点も、文末の〈参考〉に掲げたホームページで確認できる。

モロトフがスターリンの外相および副首相として活躍した1950年代、国連に加盟していたのはソ連、ウクライナ、白ロシア(現ベラルーシ)であり、ロシアはソ連の一部だった(p. 306)。したがって、彼はロシア代表ではなくソ連代表である。当時、ウクライナと白ロシアはソ連の一部だったが、1945年2月のヤルタ会談でソ連と別個の国連加盟を認められたという経緯がある。

第二次世界大戦後に連合国がドイツの戦犯を裁いた場所は「ニュルンベルク」(Nürnberg)である(p. 51)。1983年にアメリカのヴァージニア州で開催されたのは「ウィリアムズバーグ(Williamsburg)・サミット」である(p. 286)。アメリカの首都ワシントン(Washington, D. C.)は、「ワシントンD. C.」ではなく「ワシントンD. C.」と表記する(pp. 133, 206, 207, 216, 221)。D. C. は「コロンビア特別区」(District of Columbia)の略で、行政上どこの州にも属さない首都の正式名称である。ちなみに、1912年にワシントンへ桜の苗木3000本を送ったのは尾崎行雄・東京市長(当時)だった。

外国の国名・地名の日本語表記は案外難しい。カタカナの表記は常に見直されるので、自分がかつて教室で習ったのと同じとは限らない。また、「v」がいつも「ヴ」になるわけではない（例 パチカン市国、ボスニア・ヘルツェゴビナ、スペイン語のvの綴り）。国語辞典は「ギリシア」と表記するが、国名は「ギリシャ」（正式名称は「ギリシャ共和国」、英語名 Hellenic Republic）と表記する。評者は『最新世界地図：世界・日本』（帝国書院、年刊）などの地図を常に確認する。外務省ホームページ（www.mofa.go.jp/mofaj/）は一部更新が遅れているので、必ず地図を参照してほしい。

話を本書に対する指摘に戻そう。第3に、著者は5人の同時通訳者から聞き取った彼らの人生を再構築する際、第4章を「1 外国語として英語を学ぶ」「2 英語学習の動機づけ」「3 中学時代の英語の先生」「4 戦時中の英語学習」「5 捕虜との出会い」「6 終戦後の英語学習」「7 進駐軍の兵士から英語を学ぶ」「8 海外体験」「9 バイリンガルとして育つ」「10 英語の習得」「11 批判精神」「12 日本語を学ぶ」「13 第二次世界大戦の経験」と細分化した。だが、すべての節に5人全員が登場するわけではない。また、5人のうち3人は1930年代生まれだが、2人は1910年代生まれである。日本がイギリスと同盟を結んでいた1910年代とアメリカとの対立が深まる1930年代では、英語の学習環境が大きく異なっただけである。

5人の通訳者の証言はきわめて貴重で、本書では著者が博士論文で使用しなかった部分もできるかぎり採録したという（p. 382）であれば、方法論はある程度犠牲にしてでも、第4章の構成を思い切って変えた方がよかったのではないか。たとえば通訳者の半生を1人ずつ紹介した後で、英語との出会い、英語習得の方法など、重要局面ごとに彼らの共通点、相違点を比較することもできた。実際、著者も第4章「14 考察」でそのような作業を行っている。

第4に、著者は日本に存在していた通訳の例として「長崎通詞」を挙げ、「その職が通訳・翻訳にとどまらず、地役人として外交・貿易の庶務にかかわっていた」（p. 60）と紹介している。だが、評者が『日本史大辞典』第4巻

(平凡社, 1993年)と『日本史広辞典』(山川出版社, 1997年)を確認したところ、「長崎通詞」の項目自体がなかった。また、『国史大辞典』第10巻(吉川弘文館)に「長崎通詞」の項はあったが、第2巻の「オランダ通詞」をみるよう指示していた。

著者は、新人物往来社編『江戸役人役職大事典』(新人物往来社, 1995年)を参照したと推測される。同書は「長崎通詞」の項で、「長崎には、よそには認められない独特の役人があった。(中略)こうした長崎独特の地役人に、『長崎通詞』(阿蘭陀通詞<以下オランダ通詞と記す>と唐通事)がある」(pp. 266 - 267)と記している。ちなみに、中国語の通訳者には「通事」を、オランダ語の通訳者には「通詞」の字を用いる。

この項目は、中世九州史の専門家である外山幹夫・長崎大学名誉教授が執筆した。一方、新人物往来社は大衆向けの歴史読み物を掲載した雑誌『歴史読本』の発行元でもある。歴史に関する出版物で定評のある平凡社、山川出版社、吉川弘文館の辞典で取り上げられなかった項目であれば、著者も避けた方が無難だったのではないか。評者自身、日本史の専門家ではないのでこれ以上のことはわからない。本書評を読んだ日本史の専門家から何らかの指摘があれば、素直に耳を傾けたいと思う。

第5に、著者は本書で1箇所、歴史小説を引用した。具体的には、第3章で「長崎通詞が貿易だけでなく、日本の異文化受容の面でも多大な影響があったことは、シーボルト事件を扱った吉村昭の小説『ふぉん・しーほるとの娘』(新潮文庫)にも詳しい」(p. 60)と記した。

たしかに、多くの歴史小説家は豊富な史料を元に小説の構想を綿密に練り上げる。専門家の助言を得ることも多いだろう。さらに、小説家であるがゆえに関係者への聞き取りが可能になる、あるいは遺族が非公開にしていた故人の書簡等を閲覧できるかもしれない。

作家の吉村昭(1927 - 2006)は、『生麦事件』(新潮社, 1998年),『アメリカ彦蔵』(読売新聞社, 1999年),『桜田門外ノ変』(新潮社, 1990年)など、幕末維新时期を舞台にした数多くの小説を発表した。作品は、膨大な史料を綿

密に検討したことが明瞭で、時代背景という土台がきちりと組まれた上に登場人物が生き生きと描かれている。流れるような筆致にたちまち小説の世界へ引き込まれたという人は多いだろう。しかし、吉村は幕末期を生きた人物ではない。1927年生まれなので、通詞だった人物あるいはその子孫に当時の状況を聞き取りした可能性はある。仮にそうだったとしても、歴史小説はあくまでも作家独自の解釈と想像で創り上げた「作品」である。

著者は、4年前に出版した渾身の作『歴史をかえた誤訳』（新潮文庫）でも、参考文献に司馬遼太郎の『翔ぶがごとく』、吉村昭の『ふぉん・しいほるとの娘』、同『黒船』を掲げた（『歴史をかえた誤訳』、pp. 290, 292）。おそらく、第6章「通訳者の使命」で取り上げた1828年のシーボルト事件を執筆する際に参照したのだろう。ただし一般読者向けの文庫と、学位論文を元にし、人文・社会科学系の出版物で定評のあるみすず書房から発行された本書とは、書物の性格および社会的使命が異なるのはいうまでもない。

以上の指摘にもかかわらず、本書は英語を教える人、英語を学ぶ人、通訳者をめざす人はもとより、日米関係、日本外交史、安全保障の研究者にとって非常に貴重であることを評者は改めて強調したい。同時通訳者たちが残した証言は第一級史料の宝庫である。小松達也『通訳の英語 日本語』（文藝春秋、2003年）、西山千『同時通訳おもしろ話』（講談社、2004年）、村松増美『とっておきの英語：第一線同時通訳者の秘蔵話』（毎日新聞社、2002年）など、通訳者本人が外交の舞台裏のエピソードを綴った著作もあるが、バックグラウンドと経験がまったく異なる5人の通訳者を比較した研究は他に見あたらない。

本書は、各国首脳の人格や個性、歴史上重要な場面に関する通訳者の証言を多数発掘した。通訳者の観察は新聞記事から伝わりにくいことが多い。たとえば、通訳のニュアンスがうまく伝わらなかったとき、通訳者の顔をつぶさないよう別の表現で言い直したという宮澤喜一の気遣い（pp. 242 - 243）、平和憲法を守るため自民党にとどまったという三木武夫の思い（p. 320）は、彼らの人間性を端的に示している。

5人の通訳者に対する聞き取りは、5人のうち4人と現場でたびたび顔を合わせ、長年交流してきた元会議通訳者の著者だからこそなし得た。著者は、調査者および調査者と調査対象者の関係が、方法論の妥当性を阻害する要因であったかもしれないと懸念する(pp. 16, 17)。だが、インタビュアーが著者以外の人物だったら、通訳者たちは己の人生についてここまで率直に語り、研究資料として公開することに同意しただろうか。著者は相馬雪香と話をしたことはなかったが、相馬の長女不二子とは旧知だった(p. 19)。だからこそ、雪香も著者の聞き取りに快く応じ、また大いに語ったのだろう。

それから、著者が日頃力説するように、評者も文法学習の大切さをこの機会に強調したい。たしかに、話を通じる喜びは語学学習の動機付けとして重要である。第4章に、英語を学び始めたばかりだった14歳の國弘少年がネイティブ・スピーカーと直接話をするため、思い切って捕虜収容所へ出かけた話がある。國弘は、捕虜の中にいた柔らかな感じの若い青年に話しかけようと決めた。とっさに思いついた質問文“What is your country?”は英語として正しくなかったが、捕虜の青年はニコッと笑い“Scotland”と答えてくれた(pp. 92-94)。國弘は「通じたッ。通じたッ。通じたッ。通じたッ」と叫びながら自宅まで駆けていった(p. 94)。この出会いが本人いわく「運命を大きく決めたとはいよりは、狂わせ」(p. 95)、後に「同時通訳の神様」を誕生させた。

しかし、語学学習で文法は避けて通れない。英語の場合、名詞に付随するのが不定冠詞か、定冠詞か、あるいは冠詞のない単数形か、複数形かによって、意味が大きく違ってくる。1969年7月、アポロ11号による月面着陸がテレビで中継されたが、月面に一步を踏み出したアームストロング船長が“This is one small step for man, but a giant leap for mankind.”と述べたとき、著者を含めた日本の同時通訳者たちは一瞬とまどった。なぜなら、不定冠詞のない“man”は人類全体を指し、最後の“mankind”と同じ意味になって、文全体に矛盾が生じるからである。結局、不定冠詞を補足した形で「一人の人間にとっては小さな一歩ですが、人類にとっては大きな飛躍です」という趣旨の訳が流れたという。ちなみに、後年訪日したアームストロングは不定冠

詞を入れなかったことを質問され、覚えていないと答えたという（『歴史をかえた誤訳』, pp. 282 - 283）。

そして、人間は外国居住の経験だけでバイリンガルにならないことを評者は強調したい。親の都合で外国に長期間滞在する子どもたちは、現地の学校で現地の言語を学習し、週末に補習校で日本語を勉強するなど、日本に住む同じ年頃の生徒・学生の何倍も努力している。それでも、帰国後に日本語がよくわからず困る人は少なくない。漢字を即座に書けないので大学の授業のノートは全部ローマ字で書く、あるいは日本語の文章に自信がないので英語でレポートを作成する、という人も評者は見てきた。我が子を幼いうちから英語塾に行かせ、高価な教材を買い与えようと考えている人がいたら、ぜひ本書の第4 - 5章を読んでほしい。同時通訳者たちはいずれもたゆまぬ努力と工夫を重ねた上で、はじめて日本語と英語双方の第一人者になったことを忘れてはならない。

今後日本では、留学生、移住労働者、国際結婚の配偶者など、多民族・多文化との共生がいつそう求められ、言語・文化等の違いから生じる種々の誤解やトラブルを解決する知恵が必要になるだろう。その際、同時通訳者たちの経験を大いに参考にしたい。もちろん、日本人同士が互いの理解を深め、話し合いで物事を解決するのにも役に立つ。なぜなら、5人の通訳者たちは相手の言動を自分の育った環境や自分の持つ知識だけで軽々に判断せず、相手の真意を理解しようと常に多大な努力をしてきたからである。評者は彼ら全員に深い思いやりの心を感じたが、他の読者はどうだったか。

本書は「伝える」ことの大切さを改めて読者に教えてくれた。研究者、大学教員はもとより、あらゆる専攻の大学生に本書をぜひ読んでもらいたい。携帯電話や電子メールとはまったく異なる、すばらしいコミュニケーションの世界が存在することに気づくだろう。

<参考>

1. 書籍

- 京大日本史辞典編纂会編『新編日本史辞典』東京創元社 1990年
国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第2巻 吉川弘文館 1980年
同上 第9巻 吉川弘文館 1988年
同上 第10巻 吉川弘文館 1989年
下中弘編『日本史大事典』第4巻 平凡社 1993年
鳥飼玖美子『歴史をかえた誤訳』新潮社 2004年
日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』山川出版社 1997年

2. インターネット

NHK BS ディベート「8月のテーマ どうする小学校の英語教育」(2006年8月27日放送)

<http://www.nhk.or.jp/bsdebate/0608/guest.html#torikai>

(2008年9月11日アクセス)

尾崎行雄記念財団ホームページ「尾崎行雄(号堂)とは」

<http://www.ozakiyukio.or.jp/gakudo/index.html>

(2008年8月17日アクセス)

官邸ホームページ「内閣制度と歴代総理 I 歴代総理の写真と経歴 宮澤喜一」

<http://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/souri/78.html>

(2008年8月17日アクセス)

「『通訳者と戦後日米外交』 鳥飼玖美子さん」『読売新聞』2007年9月11日付

<http://www.yomiuri.co.jp/book/author/20070911bk01.htm>

(2008年7月22日アクセス)

日本通訳学会ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jais/html/about/html/about.html>

(2008年7月22日アクセス)

入国管理局ホームページ「組織と機構」

<http://www.immi.moj.go.jp/soshiki/index.html>

(2008年8月17日アクセス)

「ライシャワー大使刺さる」(昭和39年 朝日ニュースNo. 977, 1964年4月1日公開)

<http://j.footage.vox.com/library/video/6a00d41420c1f0685e00d4142747ac3c7f.html>

(2008年8月17日アクセス)

立教大学異文化コミュニケーション学科ホームページ

http://univ.rikkyo.ac.jp/cri/ken/vin/torikai_k.html